

1 自己評価及び外部評価票

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3771700899		
法人名	医療法人社団 愛有会		
事業所名	グループホーム オリブ苑		
所在地	香川県三豊市詫間町詫間679番地40		
自己評価作成日		評価結果市町受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/37/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人香川県社会福祉協議会		
所在地	香川県高松市番町一丁目10番35号		
訪問調査日	令和2年10月28日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

新型コロナウイルスが流行し開設16年目に入り、利用者様、職員共に今までにない経験をしております。外出や面会、ボランティア活動など外部接触をできる限り避けた生活の中でも、利用者がいきいきと元気に苑生活が送れるように一人ひとりのニーズにあわせ支援を行っております。苑内では利用者様と職員が家族のようにアットホームな明るい雰囲気です。開設当初から入居されている方も数名おられ、家族の方とも信頼関係が築けております。利用者や家族様が満足を感じられるよう努めております。利用者や職員が協力して作った作品は季節を感じられる楽し物になっております。また午前と午後にはリハビリ体操、オリブ苑オリジナルの健康体操を毎日取り組んでいます。

事業所の母体の協力病院は車で2分の所にあり、隣にナーシングホームがあり、協力体制にある。事業所は1ユニットで職員は少人数であるが、必要な委員会を作りフルタイム勤務の職員をそれぞれリーダーに任命し、勉強会や検討会を全員で積み重ねている。そのシステムが人材育成の効果を上げている。コロナ禍で自粛の中、利用者を楽しんで頂く為に何が出来るか考え、レクリエーションに力を入れる等、協力して行動に移している。また、「心地よい声かけ」は、より良い介護につながると、日常の介護場面の中で問題提起し検討を重ね、声掛けの重要性を共通認識している。「できるだけ長く、トイレで排泄を」の思いから、下肢筋力の体操や日常動作で立ち上がる支援を強化して介護している。目標を立て意図的な介護ケアの提供が出来ている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	グループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	愛情、やさしさ、尊重を理念として地域密着サービスの意義にふまえたサブタイトルもかけ、職員全員が理念を理解して共有している。利用者の変化に気を配り、その人らしく、地域で暮らせるように支援している。	基本理念に加え、サブタイトルでより具体的な内容を掲げている。それらに基づき、事業所の年度目標・計画を策定すると共に、個人目標を各自が立案し、実践・評価し共有している。新型コロナで自粛の中、利用者・家族に満足して頂くよう協力して取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスの流行前までは、地域の民生委員さんによるコーラスボランティアや朗読ボランティアの皆さんと毎月交流しており、隣設の施設からのお誘いを受け、オレンジかふえにも毎月参加させて頂いております。買い物支援も行う。	コロナ禍で、ボランティアや地域の方の訪問は休止している。職員は利用者いかに楽しんで頂くか取り組んでいる。レクリエーションに力を入れ、下肢の筋力に特化した体操を継続する等、前向きに工夫を凝らしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の中学校の職場体験や専門学校からの実習生の受け入れを毎年行っている。認知症高齢者の家族の悩みや不安などの相談にのるようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現在は書面での会議を行っている。事業所の出来事やサービスの現状を報告し、意見をいただき、サービス向上に活かせるようにしている。	運営推進会議で報告する内容に加え、反省・振り返りや今後の方針を記載した書面を委員に送付し、意見を返して頂いている。また、それを会議録として再度送付する方法で意見交換や共通認識を図っている。会議の委員は、民生委員、老人会会長、婦人会会長、市介護課職員、患者・家族である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	介護認定の機会に利用者の暮らしぶりや状態報告を伝えている。苑内での雰囲気も感じ取ってもらえるようにしている。	運営推進会議の情報交換や介護認定時の訪問で事業所の取り組みや利用者の状況を理解してもらい、相談や指導を受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	安全対策委員会、身体拘束委員会がミーティングで話し合い、職員の共有意識を図っている。職員がしっかり見守りを行い、利用者とのコミュニケーションを第一にして、徘徊が見られる時は一緒に歩いたり思いを傾聴している。	フルタイムの職員6人は安全・身体拘束・感染等の委員会リーダーを担い、ミーティングの中で勉強会や問題提起して話し合い、共通認識とレベルアップに取り組んでいる。不安定ながら起き上がろうとする利用者には、布団に鈴を付けて動きが分かるよう工夫する等、身体拘束しない取り組みをしている。	

7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員ミーティング時に身体拘束委員会より虐待防止についての資料を見ながら、一人ひとりが振り返り言葉使いや利用者への接し方など改め反省点など話し合いの場を持っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度が必要な場合は相談に応じ、関係機関への橋渡しをしていきたい。職員が学ぶ機会を定期的に持ち、職員の理解を深めたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、料金改定表、その都度分かりやすく書面にて説明を行い、理解、納得されるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苑独自のアンケート調査で意見や要望を引き出せるようにしている。面会時には気軽に話せる雰囲気を作り家族との信頼関係を築いている。	面会はガラス戸越しで行っている。毎月写真入りの便りを発行したり、家族が入金や、衣替え衣類を持参した時に、利用者の様子を伝え、家族の思いや希望を伺っている。膝の手術後で家族から筋力低下予防の歩行希望があるが、本人は痛がるケースでは、利用者のペースを考慮し、座位で下肢筋力の運動から取組み、計画的にすすめている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、定期的にミーティングを行い、職員の意見や提案を聞く機会を設けたり、日頃から職員とのコミュニケーションを図っている。	2カ月毎のミーティングで、委員会や全体的話をしている。コロナ禍で職員から、レクリエーションに力を入れて楽しませてあげたいと意見があり、竹を用意したそうめん流しや玉入れ等の運動会を企画する等、積極的に取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の資格取得に向けての支援を行い、取得後は本人の意思を重視し活かせるように努めている。職員の疲労やストレスの要因について気を配り、人間関係を把握するよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は、職員一人ひとりの力量を把握している。法人内外の研修に参加することを勤めている。職員が外部研修などに交替で受講できるようにし、研修後は全職員が閲覧できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホームの総会や研修などで、他の事業所の方と交流を持つ機会に、取り組み状況を話し合い、良いと思うことはケアに取り入れたりしている。		

II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援				
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者の話しを良く傾聴し、できることは本人の納得いくように努め、職員全員で話し合い受け入れられるように努めている。	
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の思いや要望を聞いたり、暮らしの情報を参考に出来るだけ希望に沿えるよう努めている。	
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の状況を確認し、職員で話し合い、相談しながら必要なサービスに繋げるように努めている。	
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者は人生の先輩であることを職員全員が共有し、しきたりや昔の話などを教えてもらっている。	
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人、家族の思いや状態をこまめに報告、相談している。面会時には本人と家族との潤滑油なるように心がけている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	娘さんが遠方におられるため、地元の娘さんの同級生が面会に来られ、誕生日をプレゼントを頂いたり、親戚の方の面会も多く、継続してもらえるように働きかけている。	コロナ禍の中、家族や親戚、遠方に住む娘さんに代わって友人が面会に来てくれている。そして、コロナ禍以降、利用者の誕生月の写真に文章を添えて、家族に送る取り組みをしている。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を把握しており、トラブル発生時は席替えや雰囲気作り配慮している。利用者同士の関係がうまくいくように常に見守りして支援している。	

22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	医療が必要になった場合、医療関係者に本人の状態報告をしている。お見舞い行き、家族の相談にのったり、電話で状態を聞いたりして支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎日の関わりの中で、表情や言葉から本人の思いを汲み取るようにしている。意思疎通が困難な場合も本人に合わせたケアをしている。	日々の関わりの中で利用者に寄り添い、安心してもらえる声掛けをすることで、思いを引き出している。帰宅願望が強い利用者に、家族に連絡を取り可能な時間帯や方法を相談して、電話で話す等の双方にとって可能で満足いく支援をしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時の本人、家族から情報を得ている。面会時に少しずつ具体的な情報を得ることが多い。本人の得意な事を発揮できるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の申し送りや職員からの情報で一人ひとりのできる力、理解する力、状態の変化等を把握して、確認、記録するようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の本人の意思や家族の要望をケアプランに反映させるようにしている。職員間で意見交換し、モニタリング、介護計画を作成している。	介護計画に基づいて、サービスを提供した際の利用者の反応や、気になった事柄等を経過記録に記録している。その情報や家族の意向を取り入れ、ミーティングでの職員意見を参考に、介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のカルテにバイタル、食事量、排泄、状態などを記録して職員が共有できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の要望に応じて、その時必要なサービスを臨機応変に対応している。必要に応じ勤務変更することもある。		

29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の民生委員のコーラスボランティアや朗読ボランティアが定期的に来られ、楽しんでもらっている。3か月に1回訪問利用サービスを利用している。馴染みの方なので皆さん喜ばれる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の主治医の往診があり、状態報告をして内服処方してもらっている。主治医の先生が来られると皆さん大変喜ばれる。怪我や状態変化があれば早急に受診している。	月2回、協力病院から往診がある。日常の健康管理や処方をしてもらい、緊急時や必要に応じて協力病院と連携をしている。専門診療科の受診は、家族に依頼しているが、必要時は職員が同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	特変時には、母体の病院と連携を取り、隣接する施設の看護師が必要に応じて対応してくれています。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には情報提供を行い、職員が交代でお見舞いに行き、様子を見ている。事業所の対応可能な段階になれば速やかに退院できるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	主治医と話し合い、事業所が対応できるまで職員全員で週末期まで対応している。	入居時、終末期の方針について書面で説明し同意を得ている。その後は状態の変化に応じて説明し、意向の共有を図っている。経口摂取が困難になった時や医療行為が必要になった時に、主治医から説明し協力病院等に転医の支援をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的にミーティングを行い、緊急時の対応方法、AEDEの使用法の勉強会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回隣の施設と合同訓練を行っている。ミーティングで消火器の場所、使い方、避難経路	年2回、隣接の施設と合同で避難訓練を行っている。火災・地震・高潮等を想定して実施している。3年前の高潮警報で隣の施設に避難し、一晩を過ごした経験がある。備蓄は担当者を決め、管理をしている。	避難訓練が昼間想定の実施であるため、夜間の一人勤務を想定した訓練をすることが必要と考えます。

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援				
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員が利用者が発する言葉かけについて、日常的に確認し、事業所全体で具体的に話し合っている。代表者からも個人情報保護や言葉使いについて、配慮するように指示がある。	職員は、利用者にとって「心地よい声かけ」ができること、その後のケアがスムーズになることを実感している。自分達の介護を受け入れる場合とそうでない場合「声かけ」の違いはどこにあるか、問題意識を持って職員間で検討している。利用者に拒否される場合は、適時検討を重ね、より良い声かけができるよう取り組んでいる。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員側で決めたことを無理に押し付ける事はせず、一人ひとりが自分で決める場面を作るようにしている。	
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にし、体調や気分に合わせて、できるだけ個別性のある支援を心がけている。	
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に馴染みの理容師の訪問散髪を行っている。家族様(お孫さん)が理容師で外出して散髪をにかけられる。離床時には整容の乱れを整え、食べこぼしや、口回りの清潔に気を付ける。マニキュアを塗られる利用者もおられる。	
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理の音やにおいで五感を刺激して、食事への関心を引き出すようにしている。好き嫌いの把握をしている。職員と利用者が同じテーブルで楽しく食事できるようにしている。	季節の旬な食材を使うように心がけ、その日の食材の状況で献立を考えている。利用者出来る皮むき等をお願いして、一緒に食事の準備をし、食卓を囲む生活をしている。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりに合わせた食事量、食事内容、食事作りをしている。食事チェック表、排泄チェック表や申し送りなどで、その日の状態を把握し、足りない時は、その都度補うようにしている。	
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは緑茶でうがいを行っている。一人ひとりの力に合わせて見守り、声掛け介助を行っている。自分で出来ない人は職員がスポンジを使い、口腔ケアを行っている。	

43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表や申し送りにより一人ひとりの排泄状況を把握している。尿意のない方にも定期的にトイレ誘導してトイレで排泄できるようにしている。紙パンツやパット類も本人の状態に合わせて見直しを行っている。	「トイレでの排泄を、できるだけ長くしてもらいたい」という思いで、「立ち上がる」ことの大切さを考え、下肢筋力の維持・増進に特化した運動を考案し、毎日時間を決め取組んでいる。車椅子に乗りっぱなしにならないよう、食卓椅子に立って乗り換えたりトイレの度に立ってもらう等、皆で協力し取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表により便秘の把握をして、申し送りで職員が共有するようにしている。毎朝、牛乳などの乳製品、繊維豊富な穀物、日常的な水分補給が摂取できるように心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	羞恥心のある利用者にはタオルをかける等の配慮をしている。入浴拒否の方には無理維持せずに、職員が交替で声掛けしたり、順番を後にしたり、翌日に回したりしている。	週2回の入浴を目標に、毎日風呂を準備して1日3名の入浴を介助している。少人数だから、時間をかけて楽しんでもらっている。要介護5の人も、2人介助でシャワー椅子に座り、保清と入浴を満喫して頂いている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりに合わせて日中の活動を促している。眠前薬を飲まれている方もいるが、その日の状態で外したり、できるだけ服用せず良眠できるよう対応している。夜間眠れない方には飲み物を提供し職員が声掛けや話しかけを行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの服薬の説明書や処方箋をすぐに見れる所に置き、職員全員が内容を把握できるようにしている。定期的に主治医に状態報告、相談、指示を仰ぎ、内服の確認をしている。職員にはミーティングで服薬の説明を行い理解を深めている。服薬時は手渡し、服薬の確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の経験や知恵を発揮する場面を常に探し考えている。苑では花壇に季節の花を植え季節感を感じていただいたり、洗濯干しや洗濯たみをお願いし感謝の言葉を伝えている。隣接の施設の買い物支援にも参加し買い物をして頂いている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在は自粛中だが、隣接の施設の認知症カフェに参加したり、ご家族の協力得て、定期的にドライブや、お墓参り、外食を楽しまれている。気候の良い時期は桜や紫陽花、海辺に散歩に出かけるよにしている。	コロナ禍で自粛となり、職員は利用者楽しんで頂くためにレクリエーションに力を入れたいと提案している。竹を切り、そうめん流しを楽しんだり、運動会と銘打って、玉入れをしたり、お月見会を催す等、知恵を出し合い工夫を凝らした取り組みをしている。	

50		<p>○お金の所持や使うことの支援</p> <p>職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している</p>	<p>ご家族より現金を少額預かり、事業所が管理している。利用者の中には自分で所持しておられる方もいる。買い物に行くときには、職員見守りの中、直接支払いをしている。</p>		
51		<p>○電話や手紙の支援</p> <p>家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている</p>	<p>本人や家族の申し出があれば自室で電話をできるようにしている。家族からの贈り物があればお礼の電話を掛けることもある。遠方の家族には写真を送ったりしている。</p>		
52	(19)	<p>○居心地のよい共用空間づくり</p> <p>共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている</p>	<p>苑内は明るく日差しが十分に注いでいる、夏場は日除けをし自然の風が感じられるようにしている。大きな窓があり、天候が良い日は日光浴をしている。フロアには季節の花を飾ったり、掲示物には春夏秋冬が分かりやすい掲示物や利用者が知っている俳句などを張り出している。</p>	<p>コロナ禍で外出できない分、職員が季節に合った掲示物の制作に力を入れて取り組んでいる。カレンダー作りや季節の果物やお月見等、ユニークで楽しめる物を協力して制作している。利用者に昔どんなことをしていたか聞きながら、回想法で引き出し、作品に取り入れて制作しているとのこと。</p>	
53		<p>○共用空間における一人ひとりの居場所づくり</p> <p>共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている</p>	<p>畳コーナーには掘ごたつがあり、好きなテレビを視聴したり、月に数回カラオケをしている。肩もみ機も置いており、利用者がいつでも自発的に利用している。</p>		
54	(20)	<p>○居心地よく過ごせる居室の配慮</p> <p>居室は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている</p>	<p>毎月の手作りカレンダーや家族との写真、自宅から持参された置時計、また、習い事をしておられた方で大正琴など趣味の道具を置き心地良い環境を意識している。</p>	<p>できるだけ自宅で使っていたものを持参してもらい、部屋に飾るように取り組んでいる。趣味の大正琴は昼のレクリエーションの後に弾いてもらう等声かけし、居心地よく過ごせるように配慮している。</p>	
55		<p>○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり</p> <p>建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している</p>	<p>苑内はバリアフリーになっており、床はクッションフロアで転倒の衝撃を吸収するようになっている。ホール、廊下、浴室、トイレには手摺りをし、利用者が歩く動線には物は絶対に置かない。トイレまでの目印や張り紙をし直ぐに分かるようにしている。</p>		